

札幌市環境プラザ運営協議会 平成 31 (2019) 年度第 1 回実施概要

- 1 日 時 令和元年 5 月 31 日 (金) 19 : 00 ~ 21 : 00
- 2 会 場 札幌エルプラザ公共 4 施設 2 階 会議室 1・2
- 3 出席者
 - (1) 委 員 : 伊井委員、一林委員、河西委員、新保委員、皆川委員、三輪委員、山本委員、高松委員、齊藤委員
 - (2) 札幌市 : 環境局環境計画課環境教育担当係長
 - (3) 事務局 : (公財) さっぽろ青少年女性活動協会 市民活動担当課長、環境係長、主任指導員、指導員、サポートスタッフ

4 会議次第

- (1) 開 会
- (2) 札幌エルプラザ公共 4 施設館長 あいさつ
- (3) 委員近況報告
- (4) ・平成 30 (2018) 年度報告
 - ・平成 31 (2019) 年度計画
 - ・その他
- (5) 札幌市環境局環境活動推進担当課長 あいさつ
- (6) 閉会

5 議事概要

- (1) 平成 30 (2018) 年度報告 事務局から平成 30 (2018) 年度の報告を行った。

●運営上の課題について

- Q 一年の運営をとおして全体、あるいは事業において課題などあれば伺いたい。
- A 見学希望や講師派遣の希望に関して、依頼者の要望に沿うための聞き取りやコーディネートに荷重がかかる現状がある。また事業については、市民の興味や関心を引く企画を考えることが難しい。
- Q 環境教育リーダー派遣について、年度内の派遣回数を上限 3 回から 2 回に変更したことについて、課題と今後の展望について伺いたい。
- A 初めて利用する団体を増やしたいと考えて変更した経緯があるが、結果としては 3 回利用していた団体が 2 回になった分が全体の派遣回数として減ってしまった。環境に関する活動が細分化している中で、広報に工夫をし、環境教育リーダーの派遣がいろいろな場面で選択肢の一つになると良いと考えている。
- Q 3 回利用できたところが 2 回となると、1 回分の活動が困るという団体に対して、それぞれが持っている資源や方法を活用してみてもどうか、という働きかけをすることが、環境活動の裾野を広げる一つの手段になると思うがどのように考えるか。
- A これまでの経験を生かしてやってみてもどうかと働きかけるほかに、自分たちで次の活動ができるように環境教育リーダーが、その先を見越してフォローをしているケースがある。そのような活動支援も講師派遣の役割にあると考えている。

- Q 派遣の枠組みとして回数が減ったことは残念ではある。全てを型にはめているのではないとの説明があったが、利用に関してどの程度融通が利くのか。
- A 回数をふやすことはできないが、2回の派遣で効果的な活動となるように活動時期や方法について提案している。内容により対応が可能であれば参加人数の多い依頼にも応えるなどしている。

【ご意見】

- 施設運営に関して、目標とする施設利用の人数や業務の優先順位を札幌市の担当者も含め相談しながら進めていかないと持続的な運営や発展は難しいと考える。

●指導者向け研修について

- Q 指導者向け事業について、環境プラザの指定管理者が同様に指定管理を受けて運営している児童会館の職員を対象に実施しているが、民間の学童保育を運営している職員も対象として働きかけてほしい。
- A 目指しているところは児童会館の職員だけではなく、保育園や民間の学童保育、子ども会で指導している方など、前に立って誰かと一緒に何かをやる機会がある方全てを指導者と考えた取り組みである。今後は対象を広げて広報をし、取り組んでいきたい。

(2) 平成 31 (2019) 年度事業計画 事務局より平成 31 (2019) 年度計画の説明を行った。

●指導者向け研修、見学対応について

- Q 指導者向け研修の中で教員に向けた具体的な方法はどの様なものか。また、施設見学において、特定の区の中学校と連携などしているのか。中学校においては、すぐに結果が出ることを具体的に実践することが日常で必要と考える。環境教育が教科指導の前面に出て、具体的に力を付けることが大事ではないだろうか。プラザの教師向け研修でどの様に関連づけて広めていくのか。
- A 見学に関しては、特定の区と連携しているということはない。多くの方に来てもらい、何かを学んでほしいと考えている。
- 指導者向け研修については、プログラムの体験を考えているが、プログラムのやり方を詳細に伝えるのではなく、どのようにもアレンジできる考え方のヒントを提供するのが役割であると考えている。

【ご意見】

- 釧路の教育委員会と企画して先生向けの講座を実施しているが、自分の体験を生徒に話すことができるだけでも来てよかったと思う、その機会を望んでいる、という先生が多い。考えたことも見たこともない、こんなに身近にこんなものがあるんだ、という違う視点をもってもらうような研修をやっていくと良いのではないかと思う。
- 環境保全と社会の発展のジレンマのように、答えはないが考えていただく機会づくり、抽斗づくりというイメージがいいのではないか。
- 見学については環境プラザの職員がどこまで対応すべきなのか。対応に協力してくれる団体のつながりがあれば、アイデアをもらったり、当日力を貸してもらおうことができるのではないか。

互いに賛同し、価値を認めたネットワークの活用があると良い。職員は調整業務を担い、特化したことはネットワークの方に参加してもらい、より価値のある対応をすることを目指していくと質の高い対応ができるのではないかと。

●平成 30（2018）年度の実績と平成 31（2019）年度の計画について

Q 年度ごとに実施回数が増減している事業があるが、予算により決まったものか。事業数が仕様書で指定されているのか、あるいは事業回数は指定管理者に裁量があるのか。

A 講師派遣については予算が関係しているが、他の事業については仕様書で指定されているものは限られたものであり、それ以外は全体のバランスを見た中で増減している。貸出教材などは例年の平均値を示しており、上限としているものではない。

Q 事業を推進するにあたり、人事異動などがあると継続と刷新のバランスに関して大変ではないか。

A 継続していくものが足踏み状態になってしまうことがあることは事実であるが、質を落とさないように工夫をし、力をつけていきたいと考えている。

●環境教育について

【ご意見】

○ 環境教育というと、主に指導者や子どもを対象としたものになりがちだが、海に行った時に、落ちていたビニール袋を見て、魚や私たちに及ぶ影響を話題にするなど、家族が過ごす日常の中にあると良いと思う。大人や保護者などに、そういった感覚を蓄積していくものが環境プラザの事業の中に入っていると良いと思う。

施設見学の際に感想を書く機会があれば、それを家庭に持ち帰って保護者とどのように共有したかを追えるといいのではないかとと思うが、それを事業にどう反映できるだろうか。

○ 見学の際に感想をいただくことがあるが、その際に、ぜひ家庭にも持ち帰って話題にしてもらいたいということを伝えたい。

○ 教育の現場では、教育を通じて家族内で共有されているのだろうか。

○ 札幌市でも家庭と学校をつなぐことを重視している。学校での学習が子どもの中で完結するだけではなく、どう広げていくのかを学校教育の中でも大事にしたいと考えている。

別の話題になるが、札幌市の学校教育の中で、札幌らしい特色ある学校教育について取り組みを始めてから 10 年を経たことで、リニューアルして進めていこうという流れになっている。2つのキーワードを設定しており、幼稚園、小学校、中学校、高校のつながりを意識するという視点、また、発信という視点で取り組みを充実させたいと思っている。2つに共通することは校種、年代を超えて、何かつながることで学習効果を高めることができず、ということ。

発信の面では、例えば、子どもが学校で学んだことを家庭で話題にし、家庭で一緒に考えることで家庭学習の充実が図れたり、学校に保護者や地域の方を招いて学習成果を発表することをおして、いろいろな人とつながり、子どもの学びが深まるとともに、次の学習への意欲が高まる、あるいは保護者や地域の方々と一緒に考えることができるなど、どんどん学びが広がっていくことを願って取り組みを進めている。

○ 資源だけではなく、知識や人の記憶も循環していくといい。学校から子ども、子どもから家庭、家庭から買い物などをおして商業的な組織などに経験を循環していくと、教育効果も上がっ

ていくのではないだろうか。

- 札幌市では小学生、中学生に夏休みと冬休みにエコライフレポートという、エコ活動をチェックしてもらい取り組みを長く続けている。子どもが家に持ち帰り、保護者と話をすることで、環境に関する共通の話題になることも狙っている。子どもから大人に広がる機会はあると思うが、大人に対するメッセージも考えていかなければならないと思い参考になった。
- 海洋プラスチックごみについて、ずいぶん前から問題になり話題にはなっていたが、ここ1年ほどは世界的にブームのようになっていると感じる。海洋プラスチックごみ問題、というよりプラスチック問題と捉えた方が良いと考える。消費者が求める消費行動ともなう経済活動としてサービスや物の提供がなされた結果である。その視点で見ると、消費者を含め我々みんなが意識を変えていくことが大事になる。
一人一人が気付くためにはやはり教育だと思う。子どもも大人も分け隔てなく事実を伝え、気づいてもらうことが大切なのではないか。
環境教育は自然環境の保全と環境負荷低減、の二つに分けられるだろう。自然環境の保全については、森や山や川で体験することが大切で、体験や経験から自然環境の大切さを感じ、守っていこうというふうになるのではないか。
環境負荷低減については、心を育てることなのではないだろうか。このままではだめだなと感じる場面がないと広がらない。誰かが情報として伝える、教える場面があると良い。
遠くまで行かなくても家の近所にちょっとした雑木林や小川があり、木の実があり虫や生き物がいるという身近な環境があるべきなのではないか。自治体も含めて、身近な自然をどう残していくのか、開発行為のようなものをどうコントロールしていくのかを伝えていくと環境教育といわずとも、子どものうちからいろいろな人たちに伝わっていくのではないかと思う。
- 仰々しくごみ拾い行きました、ではなく、何かのついでにごみを拾うなど、みんなできれいにしていく活動できればと思っている。
- プラスチック問題はホットな話題となっているが、特集コーナーや指導者向け事業でもテーマとして取り上げるなど、事業を関連付けることにより外部へのメッセージとしてつながると思うので、検討の余地があるのではないだろうか。